

# 京都橋大学 地域連携センター

つながる Vol. 8

# つながる

## CONTENTS

Interface 実践の知 第7回

**醍醐中山団地で実践知を育む**

—地域住民と学生による地域活性化活動の現状—

小辻 寿規 本学現代ビジネス学部助教

**醍醐中山団地と京都橋大学との連携事業への期待**

谷 亮治 本学客員講師

京都市文化市民局地域自治推進室まちづくりアドバイザー

第6回橘セッション

**統合保育の現状と地域連携**

中村 和夫 本学健康科学部教授

三山 岳 愛知県立大学教育福祉学部講師

山木 萌 本学健康科学部4回生

日比野 英子 本学健康科学部長、心理臨床センター長

京都モダニズム建築を訪ねて 第18回

**京都府立医科大学体育館**

河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

経営デザインフォーラム報告

**関西地域の活性化と産業振興**

今久保 幸生 本学現代ビジネス学部教授

Interview ともに 第8回

**誰もがその人らしく、いきいきと過ごせる山科にむけて**

区民が主体的に参加できるまちづくりをめざす

堀池 雅彦 京都市山科区長



# 08

## 醍醐中山団地で実践知を育む —地域住民と学生による地域活性化活動の現状—

小辻 寿規 Kotsuji, Hisanori

本学現代ビジネス学部助教

「おはようございます。」「いってらっしゃい。」。醍醐中山団地において、本学学生・留学生と住民の交流は、この朝の挨拶よりはじまる。2015年4月6日の「地域連携センター醍醐中山団地分室」および「国際シェアルーム」の開所以来、約1年間が経過した。醍醐中山団地住民の方々や京都市担当部局の方々、本学教職員および国際シェアルーム入居学生等にとっても期待と不安が交錯する中、本事業を開始することになったが約1年が経ち、数多くの相互交流を行うことにより、一定の信頼関係が構築されつつある。

本学は「地域で学び、地域で“鍛える”」地域志向の教育を行っており、本事業はその一環として位置づけられ開始された。本事業は公営住宅に大学の地域連携拠点および国際シェアルームを常設し、学生が団地の活性化の一助を担うという日本初の取り

組みとなっている。

京都市中のみならず日本中から注目を集めつつあり、数多くのテレビや新聞等のマスメディアにも取り上げられた。また、全国各地の他大学が独立行政法人都市再生機構（以下、UR）と連携し、UR団地の物件に学生が居住および滞在し地域活性化を行う取り組みがここ数年実施されている。これらの取り組みと本事業も相互交流を持ち、2015年度は全国的な大学が関わる団地活性化事業のネットワーク形成が促進される1年となった。

本事業が行なわれている京都市伏見区醍醐地域は、874年に空海の孫弟子にあたる聖宝により創建され世界文化遺産醍醐寺の他、浄土真宗の開祖親鸞の生誕地法界寺があるなど、日本の仏教において重要な地として古くから親しまれてきた。醍醐寺においては、豊臣秀吉が伽藍全体に700本の桜を植樹し、今では桜の名所としても有名である。また、醍醐地域の日野は鴨長明が草庵にて「方丈記」を著した場所とされており、鎌倉文化を語る上でも重要な地域である。

地勢としては本学が所在する山科と宇治に接しており、明治に醍醐村が成立した時点では宇治郡に属していた。1931年に京都市に編入され、宇治とは別の自治体に所属することになるが、アクセスは良好なことから、住民の生活圏には今も宇治市が含まれている。醍醐地域は戦後、大規模団地や住宅地として開発された側面もあり、団地が誕生する前と比べて人口は10倍以上に増加するなど、現在では京



入居学生ご挨拶会

都や大阪で働く人たちのベッドタウンとしても認知されている。

本事業の拠点となる醍醐中山団地は京都市営地下鉄醍醐駅から10分程度の位置にあり、京都駅にも公共交通を利用すれば20分弱で到着するなど、交通のアクセスは京都市内の他の団地と比較しても便利である。2013年12月時点で1,331人が入居し、京都市の運営する公営住宅92戸のうち9番目の規模を誇っている。そのうち高齢入居者数494人、6割弱の世帯に最低1人以上の高齢者が居住している計算となり、こちらは全体の6番目となり、他の団地と比較しても高齢化が著しい。

醍醐中山団地をはじめ、醍醐地域は小高い丘の上にある住宅が多く、10分程度の距離とはいえ、この勾配が高齢入居者には外出を億劫にしている側面がある。地域関係の希薄化以外にも地形が地域活動への参加率低下や社会的孤立の要因ともなっている。

団地の町内連合会としてもこれら高齢者の地域活動への参加率の向上や社会的孤立防止および楽しい毎日を送れるような支援を展開している。本事業とも連携して2015年度は敬老の日のお楽しみ会や、筋トレ・脳トレイベントである「いきいき幸齢教室」、地域住民に対して健康診断を行う「たちばな健康相談」等のイベントを開催してきた。

敬老の日のお楽しみ会においては、本学学生や教職員による寸劇や茶道のお点前披露、クイズ大会などが開かれ、本学と地域の高齢者が積極的に交流を行った。「いきいき幸齢教室」、「たちばな健康相談」においては生活の質の向上を目指し、学生が地域住民に対して日ごろ大学で学んだ知識や技術を生かす場となっている。活動に参加した学生たちからは、「実習以外で実践を積める貴重な機会となった。」、「外部と調整しながら企画を練り上げる勉強になった。」、「ボランティアすることに興味を持つようになった。」等の声が寄せられるなど、実践知を育む効果も発揮されている。各イベントの参加住民からは「団地の活動に参加する機会が増えた。」、「(本学の)学生たちの活動に興味を持つようになり、地域



いきいき幸齢教室

外の(本学主催の)イベントにも参加するようになった。」、「学生との交流が楽しく、もっと交流したい。」、「次回の交流イベントが楽しみ。」との声をいただくなど、地域活性化に向けて少しずつ成果が出てきている。

これらの地域活性化活動の拠点として、本学では地域連携センター醍醐中山団地分室を醍醐中山団地に常設しており、開室時には筆者が在室している。開室時には、地域住民の方々の他、地域の公共団体や本事業に興味を持つ方々の訪問があり、イベントや事業等の打ち合わせや地域連携の相談業務等を行っている。分室は、地域交流の拠点としての機能、現場と大学を繋ぐ機能、醍醐での地域連携事業の備品庫として機能を持ち、本学近郊ではあるがこの一年でサテライトキャンパスの役割も持ちつつある。

国際シェアルームにおいては、本学学生と淡江大学(台湾)からの留学生がルームシェアという形で共同生活を行っている。シェアルームに居住する学生は他の地域住民と同じレベルでの地域活動への参加が義務化されており、清掃活動や自主防火防災活動などの活動に参加している。本シェアルームの狙いは、「国際理解教育と地域で“鍛えられる”教育システム」であり、本学学生と留学生が共同生活により異文化を学んでいる。そして団地住民として地域社会と触れることにより、卒業後も地域社会の牽引者になりうる人物に育ってもらうことにある。

義務化されている活動以外にも団地に居住する学生と地域住民の交流は積極的に行われている。その一例として、挨拶や日常会話の他、お土産の受け渡し等も行われるなど、学生としてだけではなく、一般住民として地域住民の方々からも受け入れてもらいつつある。団地の住民の方々の出身地も国際色豊かで、留学生に対して留学生の母国語で話しかけてくださる機会もあり、このような交流もシェアルーム入居者学生の精神的なサポートになっているとのことである。また、学生入れ替わり時のご挨拶会も好評で同じ棟の入居者の方々を中心に団地住民の方々に参加いただくなど、学生の地域参加のきっかけとして重要な機会となっている。当初は、一年で地域住民の方々とシェアルーム入居学生の交流がここまで活発化するとは想定おらず、数年かけて今のよう状態になればと思っただけに今年1年の活動進展は嬉しい成果となった。

地域住民と大学が地域連携を行う場合、一般的には中心となる人物の力量によりその効果が大きく異なる場合が多い。醍醐中山団地の本事業をこの視点で見ると町内連合会の役員の方々や学生が居住する棟の棟長さんが活動に非常に協力的であったことや課題が出た場合も受け止め、改善に向けて努力して下さったことが大きい。また、学生のことを第一に考えてくださり、時として相談相手や防波堤の役割を果たしていただくなど、本事業が1年間無事に遂行できた最大の要因は地域住民の方々のお陰である。

地域イベントに企画段階から学生を関与させてもらったことや、学生側から持ち込んだ企画を快く引き受けてくださりブラッシュアップにも協力して下さったことは学生の実践力の向上や企画力の向上にも役立つこととなり、1年目から「地域で学び、地域で“鍛える”」という本事業の目標を一定達成することができた。

2年目となる2016年度は本事業を着実に根付かせるために重要な時期となる。2015年度に行っ

てきた事業を継続させながら、住民の方々の新しく出てきた要望にも無理のない範囲で応え、公営住宅における住民と大学による地域活性化モデル構築を行っていききたい。

2015年度のイベントにおいては、これまで地域活動を行ってきた学生だけではなく、新たに地域活動への参加に興味を持ち参加した学生やボランティア活動の一環として参加した学生が出てくるなど、学生の社会貢献に対するニーズを発掘する機会ともなった。本学には、彼ら彼女ら以外にも潜在的に社会貢献活動を行いたいと考えられる学生がおり、2016年度は本学学生がより醍醐中山団地での地域活性化活動に参加しやすい仕組みづくりを行っていくことにより、より進化した地域連携を行っていききたい。



消防防災訓練



地域連携センター分室

## 醍醐中山団地と京都橘大学との 連携事業への期待

谷 亮治 Tani, Ryoji

本学客員講師、京都市文化市民局地域自治推進室まちづくりアドバイザー

「大学が団地と協働する」というニュースは最近本当によく目にする。今やトレンドとなっているのかもしれない。

よく知られるように、かつては「ニュータウン」と呼ばれ発達した団地群は、その後の住民の高齢化とインフラの老朽化によって今や「オールドタウン」などと呼ばれることさえある。無論、長年蓄積されてきたインフラやコミュニティがすぐに失われるわけではない。それらは地域の財産として、活用されることを待っている。

団地との協働に乗り出した大学は、これらの財産をどう活用し、どんな価値を生み出していくのだろうか？ それぞれの地域で様々な試行錯誤がなされていくだろう。その中から、輝かしい成果を挙げる事例も、やがて頭角を現してくるに違いない。

醍醐中山団地と京都橘大学との連携事業も、そういう時流の一端にある。醍醐中山団地が長年育んできた財産を、京都橘大学はどのように輝かせ、どんなキラキラとした価値を生み出してくれるだろう？ 醍醐中山団地の住民の方々がそうであるように、私も、醍醐のまちづくりに縁を持つ者の一人として、刮目していきたい。



たちばな健康相談 In 醍醐中山団地



敬老会

## 「統合保育の現状と地域連携」

コメンテーター

中村 和夫 Nakamura, Kazuo

本学健康科学部教授

三山 岳 Miyama, Gaku

愛知県立大学教育福祉学部講師

保育所と大学の連携による支援活動の発表

山木 萌 Yamaki, Moe

本学健康科学部4年生

協力

野田 美穂子 Noda, Mihoko

京都市保育士会会長（みどり保育園）

森 ひかり Mori, Hikari

京都市保育士会統合保育研究委員長（円町まぶね隣保園）

企画・司会

日比野 英子 Hibino, Eiko

本学健康科学部長、心理臨床センター長

今回のセッションでは、保育の現場で日々、発達上の問題を抱えた子どもを支援している保育者が問題を提起し、それへのコメントや助言を研究者が述べた後、会場参加者も含めてディスカッションをおこなった。



会場風景

### 1. ことばの遅れと他児への攻撃行動があり、活動の切り替えが難しい子どもの保育についての検討

友だちに強い関心があるが、うまくことばで関われず、他児を叩いたり、引っ掻いたりする子どもの保育について検討した。そのような子どもに対して保育士は、「『あそぼ』って言えばいいんだよ」と、できるだけ具体的に伝わるような言葉かけを心がけている。それでも乱暴を続けるときは制止すると、長時間泣き続け、怒って保育士を叩くこともある。また、生活場面の切り替えが苦手な、遊びからおやつに、あるいは外遊びから保育室に戻るといった場面で泣き続けてしまう。

このような子の場合、母親も子どもの意思を優先したいという気持ちがあっても、子どもの願いをうまくくみ取れず、かみ合っていないように見える。

#### ■コメント 中村 和夫（本学健康科学部教授）

このような場合、発達上の問題と育て方の問題が混在するかたちで現出しているように思われるので、解決の方向としては、それらを視野に入れながら工夫するしかない。発達上の問題については、特に言葉の遅れを少しでも回復するような言語環境をつくる。保育士による言葉かけだけでなく、他児も一緒に活動して共有し合う場を意図的につくる。一人で夢中になって遊ぶ時間も尊重しつつ、場を友だちと共有し合う環境をつくる。そういうなかで、保育士が間に立ち、おもちゃや言葉かけを媒介にして、子ども同士をつなぐような働きかけが重要になると思う。

行動の切り換えについては、良いかたちで終わることができるよう、終りを明確にすることが重要だ。発達障害的な特徴が出ているならば、次の行動を視覚的・動作的なかたちで明示することが重要。「終り」を言葉かけだけでなく視覚的・動作的な合図で示して、「次の行動」を可視化するような働きかけが必要だと思う。

### 2. 保育士に1対1のかかわりを求めて他児を攻撃する子どもの保育についての検討

保育士と1対1の関わりを求め、多動で衝動性が高く、他児が近づいてくると、押す、叩く、引っ掻くなど

の行為をおこない、大きなけがを負わせることも生じるといった子どもの保育について検討した。このような子どもたちには、発達の大きな遅れはないが、そのアンバランスが特徴であることが多くみられる。

療育施設へ並行通園している場合、療育の場では、その子が一人だけでゆっくり保育士と関わって、楽しい経験だけを積み、トラブルになりがちな場面は避けるという方法を探ることがある。これは保育園のルールとはまったく違うので、療育の翌朝、保育園でとても荒れるといったことが起こる。このときの関わり方も、保育士の大きな悩みだ。

たとえば、制作の設定場面で、当該の子が他児の制作中の材料に関心を示し、突然それを取り上げて大ゲンカになるといったことがある。

#### ■コメント 三山 岳（愛知県立大学教育福祉学部講師）

療育施設に通っている子どもでも、保育園では1対1の対応は難しい。個々に見ることの重要性は十分に踏まえた上で、どう集団をつくりあげるかが課題になる。

トラブルが起きそうなとき、それをどう回避するかが重要だ。たとえば3種類の材料が目に入りやすい位置に置かれていたら、その子が奪おうとしたときに保育士が「同じのがあるよ。そうだね、これ、おもしろいね」と声をかけて、友だちとその子をつなぐことができるかもしれない。そういう工夫は可能だろう。

集団保育のなかで個々の支援や配慮が必要な場合、その子にとって魅力的な保育をどうつくりだすかがカギになる。それが対人トラブルへのガードとなる。

ディスカッションの中で、三山氏は、「その子の特性や好きなことをきちんと捉えるという意味で、療育との話し合いは重要だが、保育をどうアレンジするかは保育士の専門性が発揮される領域なので、療育等の専門家に対しては、『どういう保育をすればいいか』ではなく『私たちの保育実践は、発達的にはどういう意味を持つのか』と問うほうがいだろう。そういう質問の使い分けは重要だと思う」とアドバイスした。

### 3. 保育園と大学の連携による発達障害児へのサポート事例の報告

## 「A君の対人的コミュニケーションの発達—保育ボランティアの私との関係において—」

報告者：山木 萌（本学健康科学部4回生）

約1年間毎週1回午前中、保育園に通い、「発達障害」と考えられる2歳男児A君の生活を支援し、その全36回にわたる実践活動が報告された。

報告者からの働きかけに対して、A君がどのように反応・行動したかを記録から探ると、以下の4つにカテゴライズすることができる。

- ①一方向的働きかけ：報告者が働きかけても、A君は報告者に反応・行動を返すのではなく、自分独自の行動を行う。当初から前半期にかけて約50～70%と目立って多かったが、後半期からは約20～40%に減少し、全36回の保育終結時には0～10%と、ほぼ見られなくなった。
- ②A君からの自発的働きかけ：報告者から働きかけていないのに、A君が自発的に報告者に向けて働きかける。①に代わって、②が次第に多くなり、15年5月以降は50%超の日があるまでに増加している。
- ③相互作用：報告者の働きかけに対してA君が反応・行動を返し、相互作用が成立する。ただし、その相互作用は単発的である。全期間を通じて約20～50%という一定の割合で生起している。
- ④循環的相互作用：報告者の働きかけを契機として、報告者とA君との相互作用が何度か連続して繰り返される。きわめて稀ではあるが、成立することがあった。特に①と②から、約1年間の関わりの中でA君と報告者との間に肯定的な意味での対人的コミュニケーションが築かれていったことがわかる。

閉会あいさつに立った京都市保育士会統合保育研究委員会委員長の森氏は、「上から目線ではなく、子どもの気持ちに寄り添い、保育者自身も笑顔で過ごすことで、子どもはおとなを好きになり、社会への信頼感を育むことができる。そういう気持ちの通い合いが保育の原点だということを、あらためて心に刻むセッションだった。この機会を与えてくださった関係者の方々に感謝するとともに、今後も地域と連携し、保護者の活力となるような保育で子どもたちに寄り添っていきたい」との抱負を述べて、セッションを閉じた。

## 京都モダニズム建築を訪ねて 第18回\*

\*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

# 京都府立医科大学体育館

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

「京都府立医科大学体育館」(1958)は、この連載記事で以前紹介した「北村美術館」の並びにある。今出川河原町の交差点から南に下り、ドーナツ屋の角を東に入り、道なりにまた南へ徒歩5分程行ったところにある。鴨川の西側に沿った敷地には、この体育館の他にテニスコートと駐車場が併設されている。この建物はもともと立命館大学のもので、立命館の広小路学舎が閉校となり、現在の衣笠キャンパスに移る際の1981年3月に京都府へ売却された。立命館の広小路時代の建物施設として現役で残っている建物の一つである。当時、立命館大学の広小路キャンパスはこの体育館等を含め河原町通りを挟んで、周辺一帯に広がっていた。その後、京都府立医科大学付属の体育館として使用されるようになり、現在に至っている。

建物の設計者は建築家・富家宏康である。富家についても、以前この連載記事で紹介した。京都を中心に活躍した建築家であり、この時期の作品はモダニズム建築の影響を強く受けた作風となっている。完成時に作成されたパンフレットによれば、この体育館の東側にほぼ同面積の増築が将来計画され、玄関上部は2階観覧席になる予定であった。そのため、通常であれば短手方向に架ける鉄骨製のトラスが、南北の長手方向に架かっている。実際、この体育館の内部に入ると、トップライトとハイサイドライトに照らされたトラス梁は、かなり迫力がある(写真1)。工業製品の持つシンプルな美しさと

構造計算によって割り出された最低限の部材寸法とによって、スレンダーでありながらも建物を支える力強い構造が表現されている。梁の長手方向は37m、梁同士の間隔(スパン)は5.25m、トラス梁は全部で5本ある(見えるのは4本)。体育館の内部には正規のバスケットコートが2面設けられており、周囲の壁面はコンクリートで出来ている。正面入口から入ると1階にはエントランスホールがあり、ホールの右に事務所、左に洗面・便所がある。便所の脇に2階へ上がる階段が設置されている。図面を見ると、竣工当時にはホールと競技場の間に役員室が2室と予備室が計画されていた。ホールの南北2カ所に競技場への入口があり、中に入



写真1：体育館内観。屋根の中央部と壁面上部に開講が取られており、光が差し込んでいる。(筆者撮影)





写真2：西側外観。装飾のないシンプルな立面。(筆者撮影)

ると上述の南北 28m、東西 15m の競技場がある。競技場の南側には器具倉庫が、北側には西から選手ロッカー室、選手控室、シャワー室、水呑場、便所が配置されている。広々とした競技場にトップライトから差し込む光には、どことなく神々しささえ感じる。

さて、建物は一方通行になっている前面道路から、約車1台分東側に後退して建てられている。富家はこの建物西側正面ファサードがあまり気に入っていなかったようで、パンフレットには「(前略)何しろ今回は第一期工事で正面のデザインも中途半端で完成していません。将来の増築に無理のない様に一応のまとまりを考へたのですが、何か一枚着物を着忘れた様な感じがするのは残念な事です」とやや自虐的に記述している。しかし私が見る限り、あまり主張する事なく機能的でシンプルにまとめられた外観には好感を覚える(写真2)。また東の鴨川側から見ると外壁には鉄骨製の柱が5本露出していて、増築時には撤去されることが想定されていたと思われる(写真3)。南の壁面には2階部分に窓が開けられていて、窓と窓の間には逆三角形のコンクリート製の柱が等間隔で5枚並び、内部の鉄骨梁を支えている。この逆三角形の壁柱は構造計算から合理的な形状が導き出されたと思われるが、その合理性が意外と面白いデザインを作り出している。また、鉄とガラスとコンクリートという近代建築の代表的な材料が適材適所に用いられつつ、規則正しい配列やユニークな形状が外観にリズム



写真3：南東側外観。南側には大きな窓と逆三角形の壁柱が、東側には鉄骨製のトラス柱が見える。(筆者撮影)

やアクセントを与えていると言ってもいいだろう。西側ファサードが気に入らなかった富家も、南側の外観にはある程度満足していたのではないだろうか。計画通り増築が行われていれば、南側の外観はなかなか見応えのある立面になったものと想像する。

近代建築、特にモダニズムに立脚する装飾のないシンプルなデザインの建築は、歴史上過去の様式や伝統と隔絶する場合が多い。しかし、体育教育は心身の両面を鍛え道徳観や倫理観といった近代の忘れがちな一面を補っていたのである。そのような体育教育を行う場所をモダニズムのデザインによって包み込んでいたのであるから、モダニズムも想像以上に懐が深いということになるだろう。整然とした合理的な空間で気持ちよく体を動かす事ができれば、新しい時代に相応しい健全な心が育まれた筈である。

今回取材するにあたり、京都府立医科大学の中尾麻悠子様、立命館史資料センターの久保田謙次様と斎藤重様にご協力を頂きました。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

#### 参考図書

立命館大学体育館第一期工事竣工記念パンフレット、1958年10月  
立命館史資料センター HP「立命館あの日あの時」〈懐かしの立命館〉  
衣笠キャンパス「体育館」今昔、2013年11月28日

## 関西地域の活性化と産業振興

今久保 幸生 Imakubo, Sachio

本学現代ビジネス学部教授

主催：京都橋大学現代ビジネス学部

日時：2015年10月3日（土）13：30～17：00

会場：キャンパスプラザ京都

### プログラム

#### 基調講演

「人口減少、高齢化時代の地域産業振興」

関 満博 Seki, Mitsuhiro

明星大学経済学部教授、一橋大学名誉教授

#### 講演①

「繋がりが価値を生む～古ビル再生から町づくりへ」

岡村 充泰 Okamura, Mitsuyasu

株式会社ウエダ本社代表取締役社長

#### 講演②

「京都 Makers の発展に向けて」

西村 敏弘 Nishimura, Toshihiro

京都府商工労働観光部ものづくり振興課長

#### ディスカッション

関 満博 Seki, Mitsuhiro

明星大学経済学部教授、一橋大学名誉教授

岡村 充泰 Okamura, Mitsuyasu

株式会社ウエダ本社代表取締役社長

西村 敏弘 Nishimura, Toshihiro

京都府商工労働観光部ものづくり振興課長

#### コーディネーター

今久保 幸生 Imakubo, Sachio

本学現代ビジネス学部教授

2015年10月3日（土）、キャンパスプラザ京都にて、京都橋大学現代ビジネス学部経営学科の開設を記念する、表記の経営デザインフォーラムが開催された。

地域の活性化と産業振興は古くて新しい課題である。古くは地域の活性化等は国内における立地競争 Standortwettbewerb の性格をもっていた。だが、経済のグローバル化に伴い立地競争もグローバル化してきた。現代の地域は、立地競争の（内外）重層化—古くからの試練と新しい試練の双方—に対応せざるをえなくなっている。対応の際、地域特性をいかに生かすかがいっそう重要性を増していることにもなる。このことも踏まえて、今回のシンポジウムでは、現代の経済のグローバル化のもとでの地域の活性化と産業振興に共通の課題を把握すると同時に、国内諸他地域との対比における関西地域に固有の課題とその対応を考える、という二つの視点における報告と検討を行うこととした。

第一部では、まず、地域産業振興研究の第一人者、関満博氏（明星大学経済学部経済学科教授・一橋大学名誉教授）が、「人口減少、高齢化時代の地域産業振興」と題して基調講演を行った。氏は、日本創生会議の「増田レポート」に触れながら、北海道から九州までの諸地方の深刻な人口減少の趨勢が構造問題に基づくこと、都道府県はこの構造問題を認識して地域産業振興戦略を実行する必要があるにも拘わらず、全国1800市町村のなかで、このことを確かに認識している市町村が3つしかないこと、を具体的な事例と数値で確かめた上で、この課題に応える、新たな「<sup>おさ</sup>長」の必要性を強調した。これは、グローバル化のなかで現代日本の諸地域に課され



基調講演

R 試練と、これを確実に認識して試練に実効的に対応し  
うる主体の重要性とを、指摘したものとみてよい。

続いて、地域の企業経営者の立場から岡村充泰氏（株  
式会社ウエダ本社代表取締役社長）が「繋がりが価値を  
生む～古ビル再生から町づくりへ」と題する講演を行っ  
た。講演では、「人を大切にし、価値を高める会社」を  
増やす目的のためにオフィス・リノベーション等を展開し  
たことなどに関する様々な事例が紹介された。ここでの  
リノベーションは、規模こそ大きくはないが、概念的には  
シュンペーターのいう新結合（イノベーション）に相当す  
る。また、この意味のリノベーション等により京都市とい  
う独自の地域の振興に寄与した岡村氏は、まさに、関  
教授のいう新たな「長」に相当する人物であるといっ  
てよい。

最後に、自治体関係者として西村敏弘氏（京都府商工  
労働観光部ものづくり振興課長）が「京都 Makers の発  
展に向けて」についての講演を行った。氏は近隣府県と  
の比較を交えつつ、近年の京都府が GDP マイナス成長  
に陥っている一方、府下にはニッチだが国際競争力のある  
企業も存続していることを指摘した上で、京都府が、  
京都市とも連携しつつ、直接的財政支援、インキュー  
ベーション、人材育成、国際的イノベーション拠点形成など  
の施策を実施している状況を紹介した。氏はさらに、付  
加価値作りの仲間作り・コネクター・コーディネイター  
の重要性も指摘した。氏の講演は、行政としての京都府  
等が、イノベーションを行うアントレプレナー（企業  
者）の育成や、イノベーション実現のための人的連携の  
組織化等に加えて、企業者活動のための（シュンペ  
ーターのいう）「銀行家」の役割をも担う存在であり、そ

のようなものとして、現代のグローバル化のもとでの、  
地域特性を生かした経済振興にとって不可欠の主体とな  
っていることを再認識させるものであった。

第二部では、3つの講演に対して参加者から寄せられ  
た様々な質問に、各講師が答えるかたちでの討論がなさ  
れた。質問は、人口減少への対応、「長」の含意に関す  
るもの、京都市（大都市）と地方中小都市、振興すべき  
産業分野に関するもの、円安対応策、廃業予定者と創業  
希望者のマッチングについて、未来を担う教育現場、な  
ど多様であったが、討論時間の制約もあり、各講師の応  
答はこれら質問のいくつかに絞ってなされ、それぞれの  
立場から、新たな事実の紹介を含めて、講演を補足する  
説明がなされた。

総じて、重層化した立地競争への対応を課題とする現  
代の地域の活性化と産業振興においても、ぎりぎりのと  
ころ、人口減少や過疎化に歯止めをかけるいわば総合人  
口政策と、地域活性化・産業振興に関わる新結合（イノ  
ベーション）の実現とが、最も重要な対応策であること  
が、今回のフォーラムにおいても改めて確認された。これ  
は、ガーシェンクロンの「後発効果」等に関するテー  
ゼをもとに末廣昭が提示した「工業化の社会的能力」の  
形成ないし再生が、今日の地域における産官学の諸主体  
に対して改めて問われている、ということでもある。こ  
れらのことを、地域一般についてのみならず、とくに関  
西地域に関して再認識させたことや、当日、大学関係者、  
市民等の一般参加者をあわせて132人が参加したこと  
から、今回のシンポジウムは十分な手応えのあるシンポ  
ジウムであったといえよう。



ディスカッション

DESIGN

## 誰もがその人らしく、いきいきと過ごせる山科にむけて

区民が主体的に参加できるまちづくりをめざす

ゲスト

**堀池 雅彦** Horiike, Masahiko

京都市山科区長

聞き手

**木下 達文** Kinoshita, Tatsufumi

本学現代ビジネス学部教授、地域連携センター長



堀池区長（左）、木下教授（右）

### 市電の思い出に包まれた子ども時代

木下 お生まれは京都ですか。

堀池 そうです。子どものころ、市電がまちなかを縦横無尽に走っていたのをよく覚えています。とても便利で、わたしもよく乗りましたが、1978（昭和53）年に全路線が廃止になり、その3年後に地下鉄に移行しました。いまでも市電が残っていたら、とてもすばらしいでしょうね。バスも便利な乗り物ではありますが、市電は線路の上を走るので安心感がありました。それほどしゃれた車体ではありませんが、それをゴトゴトと揺らしながら走る光景は、京都のまちと調和していたように思います。

木下 市電は、琵琶湖疏水で発電が始まったから敷設が可能になったわけで、近代京都の復興と切り離せないものだったと言えるでしょう。

京都市の職員になられたのは何年ですか。

堀池 ちょうど京都市営地下鉄が開業した1981（昭和56）年です。大学時代に、企業に勤めても社会の役に立てるけれども、より直接的に人や社会の役に立てればいいなと思って、公務員を志しました。大学のゼミも公共経済学で、卒論は公的セクターの非効率の分析がテーマです。まるで公務員になるためのゼミや卒論ですね（笑）。

### 市バスの赤字解消のために—交通局での8年間

木下 市職員として、とくに印象に残った仕事は？

堀池 それぞれの職場で思い出がありますが、とりわけ交通局にいた8年間は深く記憶に残っています。わたしが交通局に異動したころは、地下鉄東西線の建設費が当初予算約2500億円の倍近くに高騰して、議会もマスコミも連日その話題を取り上げ、大騒ぎになっていま

した。これは京都市全体の屋台骨を揺るがしかねない、下手をすれば財政再建団体になってしまうということで、このとき初めて市役所と交通局の人事交流が始まり、その第一弾としてわたしを含め数名が交通局に移ったんです。

交通局では、市バスも年間50億円近い赤字で、市議会では「自力再生ができないなら民営化せよ」という議論もあったほどです。赤字の最大の原因は人件費で、バスの乗務員3人のうち2人は年収1000万円超という状況でした。それがマスコミにも批判されたし、赤字の原因であることも明確でしたので、わたしの仕事は端的に言えば人件費を減らすことでした。

見せかけの「合理化」では到底、赤字解消は無理なので、賃金体系はすべて見直しをおこなうとともに、3年間、緊急措置として給与カットを断行しました。まるで一人ひとりの職員の財布に手を突っ込んで、無理やりお金を取ってくるような仕事です。そのうえ、利用者のいわゆるバス離れから、人件費の削減以上に運賃収入が減ったので、もう一度、合理化をしなければいけなくなり、結局8年間に2回も、大きな合理化を担当することになりました。

合理化をするには労働組合との合意が必要で、そこに至るまでには厳しい交渉の連続でしたが、最後に労働組合の幹部の方が「若い職員が将来も希望をもってこの職場で働き続けられるなら、断腸の思いで給与削減を了解する」とおっしゃったのが印象に残っています。この英断がなければ、おそらく現在の市バスはないでしょう。そして今、市バスは年間約20億円の黒字です。

交通局で8年間を過ごした後は、市長部局に戻って、産業観光局で観光や伝統産業の振興を担当したり、都市計画局でまちづくりを考えたりして、今春<sup>\*</sup>、山科区役所に来ました。

## 「山科」—そのイメージと現実

木下 山科には、どんなイメージを持っていましたか。

堀池 京都市の都心部からすると東山の向こう側なので、やはり「一山越える」と言うか、心理的な距離感がありましたね。それから、いわゆるベッドタウンなので、もっと若いまちかなと思っていましたが、実際には高齢化が進行しています。



「水と緑と歴史のまち」の碑と「山科区誕生記念」の碑

着任してわかったのは、地域コミュニティがしっかりと存在しているということです。昨今地域コミュニティの希薄化がよく問題になりますが、山科は、住民の方々のつながりが根付いていると思います。それに加えて、物価が安く、JRに乗れば山科駅から約5分で京都駅に着きますし、地下鉄東西線を使えば都心部にもすぐに行けます。とても暮らしやすいまちだと思いますね。

それと、山が近くて、緑が多く、自然豊かなところが魅力です。

木下 大学の研究室からも山が見えます。とても静かで、学生も落ち着いて勉強できて、学問をするにはよい環境です。

堀池 そうでしょうね。自然が豊かだということは、自然災害のリスクも抱えているということですが、ふだんは緑豊かで本当にいいところだなと実感します。

## 花いっぱい美しい空間と 温かいコミュニティのあるまちに —区制40周年記念事業

木下 就任1年目の今年度は、どんなことに取り組んでいるのですか。

堀池 2016(平成28)年<sup>\*</sup>に山科区制40周年を迎えますので、その記念事業の具体化を進めています。

ひとつは、五条通や外環状線など、区内の幹線道路の歩道にプランターを並べ、そこに四季折々の花を植えて、まちを花でいっぱいにしようという「花いっぱい事業」です。花のお世話を区民の方々や学生さん、企

業、NPOやボランティアのみなさんにしていただけたら、その過程で交流が生まれて、地域コミュニティの活性化にもつながるのではないかと思います。治安の面でも、絶えず人の目があり、清掃が行き届いている地域は犯罪も起きにくいという研究結果がありますので、そういう効果も期待しています。

**木下** 単に美しい空間をつくるだけでなく、温かいコミュニティづくりの効果もねらうのは、とてもおもしろい視点だと思います。植える花の種類や植栽のデザインも参加する人たち自身が考えたら、より盛り上がるでしょうね。この事業は、来年以降も継続するのですか。

**堀池** 一過性の取組では意味がないので継続していきたいと思っています。

## 良質のアートと気軽にに出合えるまちに —区制40周年記念事業

**堀池** 記念事業のもうひとつは芸術祭の開催です。山科区内で質の高い音楽をもっと気軽に聴けたり、美術も含めた多様なアートに触れることができたらいいなと思うんです。

それと、新十条通での光のアートイベントも計画しています。毎年10月に京都橘大学のみなさんが主体的に参画してくださっている駅前陶灯路は、LED照明ではなくロウソクが使われていて、とても風情があります。光のアートイベントも、小学生や高齢者の方など、幅広い世代のみなさんに楽しんでいただけるようにしたいと思っています。

**木下** いずれの事業にしても、区民自らチャレンジしたくなるような機会にして、主体的な参加を促すことは、人びとの心身の健康にもつながると思います。自分の育てたものが花というかたちになり、それをみんなに喜んでもらえたら生きがいになるでしょうし、何らかの楽しめる趣味を持って、ワクワク・ドキドキするような時間を過ごせば、認知症の予防にもなるでしょう。

**堀池** そう思います。「健康寿命の延伸」は、京都市全体の大きなテーマになっていて、なかなか難しい課題ですが、生活習慣病の罹患率と外出頻度には相関関係があるようですから、できるだけアクティブに過ごしていただけるような企画を考えたいですね。

## 地場の野菜や果物を味わうことができるまちに —区制40周年記念事業

**堀池** もうひとつ考えているのは、理屈抜きの楽しい企画で、おいしいものを気軽に召し上がっていただけるようなグルメのお祭です。

**木下** 最近はB級グルメやご当地グルメが流行りですが、そうした気軽な食事から京料理まで、京都には多彩な食の文化があります。和食が世界文化遺産に登録されたことをきっかけにさまざまな食の取り組みが始まっていますが、意外に京都は「洋の食文化」の層が厚いまちでもあります。

**堀池** 消費に関する国の統計調査によると、京都は肉やパンの消費量で全国の上位を占めています。京都というと、和食や和菓子のイメージが強いのですが、パン屋さんやケーキ屋さんも多いので、そのあたりは再認識したいですね。

**木下** 京野菜についても、食べられる場所は実はそれほど多くなく、味わったことのない学生がけっこう多いので、京野菜を楽しめるような企画があればと思います。

**堀池** たしかにそうです。学生さんに限らず、現代人は、栄養バランスの悪さや野菜不足が指摘されています。健康寿命の延伸には、減塩とともに野菜の摂取が欠かせませんが、幸いなことに、山科には地場の野菜の無人販売所もたくさんあって、道を歩いていると新鮮な小松菜が1束100円ほどで買えたりします。わたしは山科なすや山科とうがらしが大好きなので、地場野菜を手軽に入手できるのはとてもありがたい（笑）。それに、山科のぶどうも本当においしいですね。

**木下** ここ山科は高級ぶどうの産地です。土がとても良質で、古くから農業の盛んな地域でしたから、いまでも野菜の洗い場など、昔ながらの風景が残っています。そうした農業文化の継承という視点も、今後の事業に取り入れていただければうれしく思います。

## 山科のまちづくりのこれから —地域課題と創造的な課題

**木下** 今後、どんな事業に取り組みたいですか。

**堀池** 大きく分けると2つあって、ひとつは地域課題の解決、もうひとつは創造的な課題への挑戦です。地域



堀池 雅彦

昭和33年、京都市生まれ。昭和56年、同志社大学経済学部卒業、京都市採用。  
平成15年、産業観光局観光振興課長。平成19年、同 伝統産業課長。  
平成21年、同 商工部長。平成23年、都市計画局歩くまち京都推進室長。  
平成24年、交通政策監。平成27年、山科区長。

課題としては、高齢化・少子化、子どもの貧困への対応などがあります。また、治安については、実際の犯罪件数よりも「山科は犯罪が多い」というイメージが先行している面もあるかと思いますが、そうしたマイナスイメージの払拭も含めて、安心・安全なまちにするという課題があります。

子どもの貧困は、かなり深刻な状況とされますので、NPO 法人の方々とも連携して取り組んでいきたいと考えています。子育て支援や障害者の方々に向けた施策も大変重要です。

創造的な課題では、山科は、中小企業が多くて、清水焼団地もありますし、金属加工の分野などで個性的な企業も数多く存在します。それと同時に、山科では飲食業がとても高い付加価値を生み出していることが国の調査などで分かっているのですが、残念なことに観光客を取り込めていない。飲食業が高い付加価値を持っているということは、観光客を取り込む力を潜在的に秘めているわけですから、そのパワーをもっと発揮していただこうと思っています。いま、山科ならではの地域資源を活かした観光プランを考えているところです。

木下 醍醐寺は観光客にも大人気で、京阪バスの山科急行線、通称「山急」の醍醐寺行きは、観光シーズンの春と秋には大行列ができます。そのバスが山科の随心院や勧修寺も回るようになれば観光客にも喜ばれるのではないのでしょうか。山科は、とにかく通過交通の多さが目立ちますが、楽しく滞留できるポイントを増やすだけでも観光客を呼び込めるのではないかと思います。

堀池 醍醐寺があるのは伏見区ですが、観光客には行政区の違いは何の意味もないので、区境を越えた取り組みも必要ですね。

それから、高齢化というネガティブなイメージがつきまといますが、お年寄りが長い人生のなかで培ってこられた知恵や力は、とても貴重で、わたしたちの社会に役立つものです。そこで、そうした知恵を誰にでも使い

やすいアプリケーションソフトにして、区民のみなさんに提供したり、お年寄り自身にいろいろな情報を集めていただいて、それをデータベース化するといった取組も考えていますので、ぜひ京都橘大学の先生方や学生のみなさんご協力をお願いします。

木下 いまの学生は、デジタルコンテンツのユーザーとしてはとても優秀ですから、彼らの感性にひっかかるようなアプリは大きく伸びる可能性があります。

堀池 アプリの開発は供給側というか、制作者側の論理に立ちがちですが、それでは絶対に成功しませんので、ぜひユーザー視点のご意見をいただいて、使い勝手のよいアプリにしたいと思います。

## 企画の段階から学生・若者の参加を

木下 本学の地域連携センターは、行政や町内会、NPO 法人やボランティアなど、いろいろなセクターと連携しながら、そのセクターだけでは解決できない問題について、地域全体で効率化したり、ノウハウを共有化したり、ネットワークを構築するなどして対応したいと考えています。区役所として大学にどんな期待や要望を持っていますか。

堀池 以前はイベントのスタッフとして手伝っていたかのようなお付き合いもあったと思いますが、これからは企画の段階からパートナーとして一緒にやっていけたらと思っています。アプリの制作などはまさにそれで、地域に大学があるということは、とてもありがたいことです。

もちろん、学生さんは学業が優先ですので、できる範囲でかまいません。ぜひ最初のステージから一緒に何かをつくりあげていきましょう。大いに期待しています。(了)

※このインタビューは2015(平成27)年12月18日に収録しました。

## 地域連携15年の重みと希望

早いもので、2001年の4月に京都橋大学に文化政策学部が誕生し、大学が本格的に京都市と地域連携を始めてから丸15年が経過した。その間、大学は共学となり、2学部だったのが5学部10学科に増え、学生数も4千名を超え、多様な形で活動を展開している。思い起こせば、当時、大学の立地する山科区においては地域連携といえるような活動はほとんどなく、全てが試行錯誤の連続であり、とくに筆者が行っていた市民参画事業においては、前例のないため無我夢中で進めていたのを昨日のように思い出す。その根幹となるのは「地域資源再評価活動」であり、地域の歴史や資源の重要性を浮き彫りにしていくことで、住民に土地の魅力を感じてもらうことであった。山科は京都の中心部から見ると東の端に位置するため、常に「中心ではない」という見方をされる場合が多いが、中臣遺跡に代表されるように、旧石器時代から続く途方もない長い時間の中においては、常に人々が生活していた痕跡が市内の中でも比較的高いことが分かっている。つまり、われわれは京都という土地について平安時代をすぐに思い起こすが、場合によってはもっと大きな視野で地域を捉えることの重要性について考えさせられた。これは何もここだけに限った問題ではなく、そうした複合的な視点・視座というのは、今後の地域振興においては、現代の閉塞感を打ち破る一つの突破口になり得ると考える。

堀池雅彦氏は、2015年度より山科区長に就任し、2016年度が区政40周年という節目の時期であることから、数多くの記念事業の企画を提案されていることは

当インタビューからも伺い知ることができる。また、区長就任以前については、京都市のバス事業の改革や、インタビュー記事には書かれていないが四条道りの歩道拡幅事業を推進され、かなりしっかりした成果を出される方であるとの認識をすることができた。ちなみに、歩道拡幅事業については今でも賛否両論があるようであるが、個人的には普段から繁華街に自家用車で行くことはなく、非常に歩きにくかった歩道の使い勝手が大幅に改善されたように感じている。もちろん、営業関係の車両等については今後の詳しい検証が必要になるだろうが、日本はもっと「パーク＆ライド」政策を真剣に考えるべきであると個人的には考えている。山科地域についてもそのことを以前書いた本の中で提案したことがあるが、京都東インターで降りた車を四ノ宮か山科駅辺りで駐車させて地下鉄を使うように誘導すれば、鉄道も商店街も潤い、渋滞も軽減されるはずなのである。あわせて、この地域は東海道や奈良街道など、歴史的な街道も多いので、新しい建物をつくるにしても、もう少し歴史的景観に配慮した計画にしていくと、観光的な要素も加わっていくことになるだろう。いずれにしても、15年前に来た時と現在とでは、まちの人の地域に対する思いというのは大きく変化しており、また地域ネットワークも深まってきているため、よりアクティブな政策が展開できる段階にきている。筆者はこうした「人の財産」こそ重要であり、40周年事業がそうした方々の智慧が存分に生かされる形で展開していくことを心より願うところである。

(木下達文)

つながる Vol. 8 (2016年3月20日)

発行：京都橋大学 地域連携センター

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34

Telephone: 075-574-4186 Facsimile: 075-574-4149

http://www.tachibana-u.ac.jp E-mail: icps@tachibana-u.ac.jp



京都橋大学  
地域連携センター  
Center for Regional Collaboration  
KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY